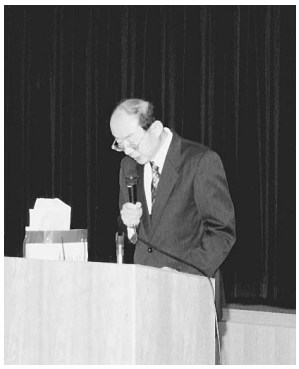
三島由紀夫初期作品の問題

― 川端康成との往復書簡を契機として ―

吉　田　永　宏



今回の図書館の展示が現代（大正・昭和期）作家の直筆、手蹟をテーマとしたものでありますので、それに因んで、文学者同士のとり交した書簡ということで川端康成と三島由紀夫との往復書簡を話題に致します。

この２人の関係は、無論川端康成が文学上の先輩、師匠で、三島由紀夫が後輩です。この両者の間の書簡は新潮社から『川端康成・三島由紀夫 往復書簡』のタイトルで刊行（1997年12月10日）されています。こういう書物の存在は大変有り難いことです。この本の225ページから234ページにかけて両者の略年譜が、上段に川端康成のものが、下段に三島由紀夫のものが、同年の各々を対照させて理解し易いように記されていて、これも有り難いことです。この略年譜の昭和21年の下段（三島の項）に「１月、川端康成を初めて訪ねる。６月、氏の推薦で『煙草』を《人間》に発表し文壇に登場」とあります。

この間の事情を雑誌『人間』の編集者であった木村徳三が『文芸編集者　その跫音』（1982年６月21日・テイビーエス・ブリタニカ刊）の中で次のように証言しています。「『木村さん、これ読んでください。よかったら《人間》に載っけてください』／川端さんはいつもこんな調子で、自分のもとに届いた原稿を私に手渡した。既成作家の作品でも、無名のひとの原稿でも全く変りなく、無表情な顔で無雑作に手交するのである。小説の目利きについては超一流の川端さんが一読した上であったろうから、一、二の例外はあったがほとんどの作品は、私が文句をつけようもない。それでも必ず『あなたが読んでよかったら』と言い添えた。三島由紀夫氏の最初の原稿のときも、『若いひとの小説ですが、載せる載せないは、あなたの判断にまかせますよ』ということだった。《人間》創刊の間もないときである。受け取ったのは『煙草』と『岬にての物語』の二作であった」。この二作についての木村徳三の意見は、「岬にての物語」は瑞々しくて若い人の小説らしいのだがロマンティックなニヒリズムが生硬過ぎて作為の過ぎる小説で、それに比べて「煙草」はむしろ素直で、新人作品には珍しく達成度が高く感じられ、どちらかと言えば「煙草」を採りたいというものであり、その評価をそのまま受容した川端の決定で木村はこの無名の新人の作品を直ぐに『人間』に掲載しました。昭和21年２月19日付の川端宛ての書簡で三島（発信者署名は本名の平岡公威）は、「来週月曜（廿五日）は事務所へお出でになりますか。その節、『岬にての物語』と『盗賊』第一章との拙稿を持参いたしまして、おたづね申上げたいと存じます」と認めています。但し、「煙草」の『人間』に掲載後川端に宛てての三島の感謝の書簡は前出書に収録されていません。三島由紀夫のこと故お礼の手紙を書かなかったとは考えられないのです。

『人間』昭和21年２月号に発表された桑原武夫「日本現代小説の弱点」に対して甚だしい不本意を覚えた三島由紀夫は早速川端康成に宛てて、「『芸術が摸倣から生れる』といふ浅薄な結論は正気の沙汰とも思へませんでした。芸術はやはり体験から生れるものではありますまいか、それは日常的生活体験より一段高次の体験であり、醸造作用を経て象徴化せられた体験です。いはゆる生（ナマ）の体験が『時』（精神的時間）の醸造作用によつて象徴に変化します。醸造（陶汰（ママ）と選択と化学変化）は全く無意志的に本能的に行はれます。即ち芸術上の体験とは先験的なものによつて淘汰せられた特殊体験です。従つて芸術の形成に当つては、第一段階の特殊体験（一種の緩慢な霊感）に却つて超歴史的契機が潜在し、第二段階の無意志的醸造作用に、歴史的契機が伏在します」との批判を展開しており（昭和21年３月３日付書簡）、後に「仮面の告白」に結実する三島由紀夫

の小説観がここに十分に表現されていると思えます。既成のリアリズムである大正期以来の〈私小説〉を止揚しようとの意欲が窺えるものです。ただ、同じ書簡の冒頭部で三島が「シルレルへの手紙の中でヘルデルリーンが言つてをります、『わたしはいつもあなたにお会ひしたい気持にとらはれてゐました。しかしあなたにお会ひすればいつもわたしは、あなたに引比べて自分の身のはかなさを感じてくるばかりでございました』又別の箇処で、『わたしがあなたの傍にゐた間は、わたしの心は全く小さくなつてゐました。さてあなたの傍を離れてみますと、わたしは自分の心の乱れをどうすることも出来なくなりました』――私にもこのヘルデルリーンの『乱れ心』の兆候がはつきりと現れてをります」と認めているのは如何にも芝居気たっぷりで、後に話題を呼んだ三島由紀夫の性向までもがここには現われていると言っても過言ではないようです。この書簡には三島の若き日の文学観が横溢しており、「芸術至上をモツトオとして来ますと、今度は別箇の造型的意欲に圧倒されて、型式主義に陥り、いつか本来の内面的衝動は霧散して人工的な無内容の文学となります。（中略）人工とは人間の一番純粋な偽りのない意欲ではないでせうか。単なる事実の再現といふ意欲より、もつと強い人間性に根ざしたものではないでせうか。ロマンチツク・メカニズムは、リアリズムよりもつとリアルではないでせうか。それはメカニツクな方法論の上で、人工的に、ロマンチツクな内面的衝動を何度となく再生産し回収し再燃せしめてゆくのです」という記述には、揺れながらの若い激しい芸術衝動がよく示されています。なお、先の三島の書簡に記されている「盗賊」は各章が各々固有の題名を持った小説として各誌に分載された、三島由紀夫の処女長篇で、結婚式の当夜に互いの愛の為にではなく心中を遂げるに至る一組の男女の物語です。全篇は昭和23年11月に真光社から川端康成の熱烈な序文を付した上で刊行されましたが、殆ど無視されたといってよい作品です。ジョン・ネイスンは『三島由紀夫―ある評伝―』（野口武彦訳・1976年６月25日・新潮社刊）で、「『盗賊』の主人公は、昭和21年当時に三島が見ていたにちがいない彼自身に似ている。学習院から進んだ帝国大学を卒業したばかりの年齢で、華族の令息である藤村明秀は、夢想のあまりの強さのために、『現在の刹那を測る物差を失くして』しまっているような性格である」と分析しています。また本多秋五は「盗賊」に触れて、「（だれにも）47年当時の、あの騒然たる社会的動乱のなかで、建物の土台をきずくことがまず問題であり、その敷地をどこに選ぶべきかが問題であったとき、レースのカーテンの出来不出来に心を配る遑がなかったからである」（「〝故意〟の時代錯誤」『続物語戦後文学史』昭和37年11月30日・新潮社刊）とその発表時の受容する側の時代的条件の特性についても考慮に入れています。

本多秋五の『物語戦後文学史』の中に川端康成にも触れた部分があるので、その箇所を引用してみます。「臼井吉見は、『展望』をはじめて間もないころ、三島由紀夫が『中世』『煙草』『岬にての物語』『サーカス』『彩絵硝子』など、合計八編の小説を持ちこんできたのを読んで、自分の肌には合わないけれども、これは一種の天才だといったところ、中村光夫が、とんでもない、こんなものは『マイナス150点だ』と叱咤したことを語っている。（文学界、52.11、臼井・中村の対談『三島由紀夫』）／おなじ臼井の言葉によれば、現在は『三島のＰＴＡ会長』（小説中公、61.1）のような中村光夫にしてからが、当時は三島をてんで認めなかったのである。これがむしろ当時の一般の見方であったと思う。無名の大学生三島の『煙草』を、あえて『人間』に推薦した川端康成は、さすがに新人発見の名人だけのことが、どこかあったのである」（「理解されなかった三島由紀夫」）。本多秋五自身の評は、「（『盗賊』は）最後に辛うじて表題の『盗賊』という意味がわかるところにまで漕ぎつけ、最初の意図をまがりなりにも実現したわけだが、いかにも頭のなかだけでデッち上げた無理な小説」（前掲「〝故意〟の時代錯誤」）という点にあり、「『現実に絶対にありえないロマンティックな心理をあくまでリアルに具現しよう』（三島「盗賊ノオト」―吉田）などと企てるところには、現実からではなく、夢から、あそびから出発する、この作者の特色が現われているともいえる」（「同前」）という指摘にあります。三島のこれら初期の作品群を指して「国民全体からいえばほんの上澄みにしかすぎない貴族的な有閑階級の、いわば箸の上げ下ろしを一大事のごとく描いた小説」であり、「反時代的な、時代錯誤といえば時代錯誤の小説であった」とした上で、「まわりの抵抗を意識した、故意の時代錯誤であったのだろう」とする本多秋五の推量に首肯しないわけにはいきません。

木村徳三宛ての三島由紀夫の書簡（平岡公威名・昭和21年５月３日付）に、「今、僕は力をつくして

三体の道へ入らなければなりません。佐藤さん（佐藤春夫―吉田）で満足出来ず、川端さんに就いたのはこんな動機からでした。僕は川端さんにただ『小説』を教へていただきたいのです。それなら所謂『小説家』は沢山あるではないか、と云はれさうですが、伝統の美といふ点、資質の柔弱といふ点で川端さんの他に求めるべき誰がありませう。（この『柔弱』といふ言葉、『たわやめぶり』とでもいふのでせうか、最もよい意味で）――昔の剣術家の弟子が、はじめ少しも剣術を教へられず雑巾掛ばかりやらされたといふ話がありますが、僕も川端さんが僕の根本的な問題にこたへて下さるまでいつまでもお待ちしようと思ひます。（中略）拙ない小品『煙草』を『人間』にお載せ下さる御厚意は、僕にはやはり『救助の手』の最も大きなものでした。何の気なしにさし出した手に、救はれた喜びで握手されては誰しも愕きませう。（中略）戦争中異常な執着で僕らの世代の少数のものは、文学にしがみつき、その純粋を念じて来ました。文学純粋宗ともいふべき狂信的な宗派に身を投げ入れました。そして時代のあらゆる愚劣さと不純さから、何とかしてその純美を守らうとして来ました」という一種の決意表明とも呼ぶべきものがあります。ここに記されている「純美を守らう」との決意が、善くも悪くもその後の三島由紀夫の文学を一貫しているモティーフであり、彼の文学のテーマであったと改めて思います。

ここで話題を三島由紀夫の戦後期の決定作であり代表作である「仮面の告白」に転じます。川端康成宛て昭和23年11月２日付の書簡で三島由紀夫は、「11月末よりとりかゝる河出の書下ろしで、本当に腰を据えた仕事をしたいと思つてをります。『仮面の告白』といふ仮題で、はじめての自伝小説を書きたく、ボオドレエルの『死刑囚にして死刑執行人』といふ二重の決心で、自己解剖をいたしまして、自分が信じたと信じ、又読者の目にも私が信じてゐるとみえた美神を絞殺して、なほその上に美神がよみがへるかどうかを試めしたいと存じます。ずゐぶん放埒な分析で、この作品を読んだあと、私の小説をもう読まぬといふ読者もあらはれようかと存じ、相当な決心でとりかゝる所存でございますが、この作品を『美しい』と言つてくれる人があつたら、その人こそ私の最も深い理解者であらうと思はれます。（中略）又しても理解されずに終つてしまふかとも思はれますが……」と記しています。三島由紀夫は戦後文学の第４年目に「仮面の告白」を発表するに及んで、初めて否定のできない特異な才能として文壇の評価を得たのであったとするのは前掲『物語戦後文学史』（「怪作『仮面の告白』」）に於ける本多秋五ですが、中村光夫が「マイナス150点」という評価を変更したのもこの作品によってでありました。三島の「仮面の告白」（河出書房）が世に出たのは昭和24年７月ですが、この頃が敗戦処理の漸くの終結、換言すれば第１次戦後期の終了を表象したと言い得ます。「三島は、川端康成の掌小説について、川端という人は、自分の一部に水泳ぎをしたいという才能があれば、さあ行って泳いでおいで、私は止めはしないのだ、しかし、溺れたって私は知らないぞ、といって行かせてやる人である、綱渡りをやってみたいという才能、何か軽薄な真似をしてみたいという才能、赤い背広をきて銀座を歩いてみたいという才能、どんな才能もみな勝手にやりたい放題にまかせる、それに恰好な舞台が掌小説であったのだ、『極端な才能の自由放任主義は、おそろしい加速度で、彼自身の作家としての属性を捨離し・失い・すりへらす手段であった。すりへらす後から後からその属性は湧いて来た。』（『川端康成』）と書いたが、三島自身の仕事が、まずざっとそんな風にみえたのである」と本多は三島由紀夫の川端康成観を通じて、この両者の近親性を指摘しています（「怪作『仮面の告白』」）。

昭和21年７月24日付の木村徳三に宛てた書簡でも若き日の三島由紀夫の川端康成観がよく窺えます。「川端さんの『過去』は二回目までの連載（文藝春秋）をよんで『戦後』という（ママ）一つの決定的な運命的な雰囲気を描出した最初のものだと思ひました。経験としての戦争と、外的事件としての戦争と、そのいずれかを扱つた相不変の新小説は無数にありますが、文学、芸術そのものの当然の運命たる傷痍といたましい恢復とそこに象徴される『永遠の無為』とを嘔気のするほど克明に書いた文学、それが『戦後の文学』であるべきです。精神のどうしようもない、いやらしいほどのふてぶてしさ。揚棄し、あるひはしたつもりでゐた本能的な衝動が、再びあらゆる精神と思想と情感と感覚をまとつてあらはれて、我々に自堕落な安心を齎らす主題、それが『再会』です。戦後は思想が活撥に生れ死滅した戦時と比較されます。そこで疲労した人々が疲労した思想とめぐり合ひ、みとつてやり、臨終に立ち会つてやります。滅びようとする情欲が、人々の疲労をますます暗く重たくします。芸術家は戦後といふ雰囲気を、あるき

はめて淫らなものとして象徴させるでせう。この直感はやはり正しいものと思はれます」。少し長い引用になりましたが、三島由紀夫の戦後観、戦後思想観、戦後文学観が併せて窺えて面白いものがあります。

先に掲げました三島由紀夫の初めての長編小説「盗賊」に川端康成が序文を寄せているのですが、その中に、「私は三島君の早成の才華が眩しくもあり、痛ましくもある。三島君の新しさは容易に理解されない。三島君自身にも容易には理解しにくいのかもしれぬ。三島君は自分の作品によつてなんの傷も負はないかのやうに見る人もあらう。しかし三島君の数々の深い傷から作品が出てゐると見る人もあらう。この冷たさうな毒は決して人に飲ませるものではないやうな強さもある。この脆さうな造花は生花の髄を編み合はせたやうな生々しさもある」という一節があります。三島由紀夫の自決後直ちに筆を執ったと思われる追悼文「三島由紀夫」(『新潮』1971年１月）の末尾部で、川端康成は「盗賊」に自らが寄せたその序文に触れながら、「私は年少（二十三歳）の友人の作品に行きとどかぬ理解で序文を書く心おくれで、あいまいなことを言つた。しかし自分が親愛し敬尊する作家ほどかへつて自分に理解がおよばぬと思ふふしはある。私にとつて横光利一君の文学がさうであつた。三島君の死から私は横光君が思ひ出されてならない。二人の天才作家の悲劇や思想が似てゐるとするのではない。横光君が私と同年の無二の師友であり、三島君が私とは年少の無二の師友だつたからである。私はこの二人の後にまた生きた師友にめぐりあへるであらうか。私は三島君の『豊饒の海』の第一部、第二部の出版に際して、讃歎の広告文を書いた。私はこの長編を『源氏物語』以来の日本小説の名作かと思つたのであつた。――三島君の死の行動について、今私はただ無言でゐたい」と書いています。追悼文であるだけに、故人に向けた些かオーバーな表現と思われるふしもありますが、三島の才能に対する川端の評価については嘘偽りはないでしょう。

話が前後しますが、三島由紀夫は、昭和21年の正月に「中世」と「煙草」の原稿を携えて初めて川端康成を訪ねた折りのことを「私の遍歴時代」(『東京新聞』夕刊・昭和38年１月10日～５月23日。のち昭和39年４月・講談社刊）の中で、次のように回想しています。

「なぜ私が川端氏を訪問する勇気を持つたか、そのへんがどうも記憶があいまいなのであるが、紹介状も持たずに有名作家を訪問するほどの蛮勇は持ち合せなかつた私であるから、何か私を力づける事情があつたにちがひない。氏が『花ざかりの森』や、『文藝世紀』所載の『中世』を読んでをられて、誰かに賞讃の言葉を洩らされて、それが私の耳に届いてをり、それを私が頼みの綱にしてゐたことは確かであつたが。／氏は当時鎌倉大塔宮裏の、蒲原有明氏の家を借りてをられ、家主と同居の形になつてゐた。バスなんかない時代で、駅から歩いて行くほかはなかつたが、行つてみると座敷一杯のお客様で、すでに氏は鎌倉文庫の重役として、『人間』を創刊されてをり、それまで単調な学校生活と家庭としか知らなかつた私は、このときはじめて、戦後の文壇の湧き立つた活力に触れたのである。／雨後の筍のやうに出た出版社が、氏の旧作の復刊のおねがひに殺到してをり、その上、川崎長太郎氏や、石塚友二氏や、川上康子氏などの顔も見え、ゴム長をはいてひょこひょこ帰つてゆく川崎氏を、文壇にうとい私は本当の魚屋かと思つて眺めてゐた。／氏はそのまんなかに、一九六三年の今日もすこしも変らぬ、平静な、面白くも可笑しくもないやうな顔をして、黙つて座つてをられた。／川端康成氏の推薦で『煙草』が『人間』に載るといふ吉報を得たのは、それから間もなくのことであつた。私は鎌倉へ飛んで行つて、お礼を申し述べたが、今もあのときのうれしさは忘れられない。それは私の作品がはじめて『戦後の』、すなはちオーソドックスの文壇に紹介されることだつたからである。／たしかその時、『中世』もそのうちに載せてやらうといふお話があり、思ひがけない喜びが重なつた。（中略）／かうなるともう私は鎌倉文庫へは木戸御免で、デパートの二階の事務所を、たまたま大学の帰り途であるところから、用もないのにたびたび訪問するやうになつた。『人間』の編集長の木村徳三氏にも紹介され、この小説の稀代の『読み手』から、技術上の注意をいろいろと受けて、どれだけ力づけられたかわからない。私の『人間』所載の初期作品『夜の仕度』や『春子』等は、ほとんど木村氏との共作と云つても過言ではないほど、氏の綿密な注意に従つて書き直され補訂されたものである。／思ふに新進作家と文藝雑誌の編集者との関係は、新人ボクサーと老練なトレエナーとの関係の如くあるべきで、木村氏を得た私は実に幸運であつたが、かういふ幸運を得た作家は私ばかりではない」。

現代文学史を考える上から言っても、無視してはならない興味のある挿話です。三島由紀夫が師友に恵まれたのは確かです。たとい、「私の遍歴時代」に先の引用部分の二つばかり前の章に「少年期と青年期の堺のナルシシズムは、自分のために何をでも利用する。世界の滅亡をでも利用する。鏡は大きければ大きいほどいい。二十歳の私は、自分を何とでも夢想することができた。薄命の天才とも。日本の美的伝統の最後の若者とも。デカダン中のデカダン、頽唐期の最後の皇帝とも。それから、美の特攻隊とも。……」という、まことに意味深長な言辞が記されているにしてもです。また、「戦争末期に、われこそ時代を象徴する者と信じてゐた夢も消えて、二十歳で早くも、時代おくれになつてしまつた自分を発見した」との記述があるにしてもです。

しかし、さしもの三島由紀夫も新人故の「待たされる」辛さを味わわされることになります。３月号（昭和21年）ぐらいには出ると思っていた「煙草」が７月号に漸く出るまで催促を口に出して言うこともならず、毎月の『人間』の新聞広告を見てはがっかりし、鎌倉文庫を訪ねても、用件が判っているだけに長時間待たされたりします。「私の遍歴時代」のその頃の事を記述した第６章は、次の文章で締め括られています。

「――『煙草』が７月号に載つたとき、あんまり待ちくたびれて、私は多少感激を失つてゐた。評判はといふと、まるで問題にもされなかつた、といふのが正直なところであらう。私は又ガッカリして法律の勉強をはじめた」。

（よしだ　ながひろ　文学部教授）

この講演は、平成11年度秋季特別展「作家の自筆展―上方文藝玉手箱―」にちなみ、記念講演会として平成11年10月25日（月）に図書館ホールで開催したものである。